

朝。

提出されている「まとめの感想文」を手につ。

ずしっと重みが手に伝わる。

教師として生きていることを実感する瞬間。

朝、教室に子どもたちが入ってきます。

それを迎える自分。

教室はだんだんと子どもたちの〈声〉で満たされてきます。

さあ、ギアをローからセカンドに入れましょうか。

今日もまたそこから数々の子どもたちとのやり取りが始まります。

教室は毎日毎日無限のやり取りが繰り広げられる場所。

そんなやり取りの一つ一つがかけがえのない瞬間。

そんな「教師の日常」を真に輝かせたい……。

教師の道を選んだあなたが真に輝くとき。

それは子どもが輝くときです。

子どもが輝いているのは子どもが一生懸命考えているときです。思考しているときです。

本書は、教師なら誰もが遭遇する子どもとの対峙場面で、いかに子どもたちを思考させるかを考え、実践したこととの記録です。

子どもが輝けば教師であるあなたが輝きます。

子どもたちを書けるようにしたい。

子どもたちを話せるようにしたい。

子どもたちを聞けるようにしたい。

子どもたちを読めるようにしたい。

教師なら誰しも思うことです。

そのためには「授業」です。

毎日の「授業」にこそ、最大限の力を注ぎましょう。

そして子どもたちを輝かせて、自分も教師として輝きましょう。

教師をしていて良かった、と心から思える毎日を送りましょう。

そのために、日常の教師の役割を改めて意識し直すことから始めましょう。実はそれこそが教師としてのエキサイティングな瞬間を生み出すのです。

子どもに話すときは？

板書するときは？

日記や自学指導は？

音読指導のときは？

読み取りの授業での役割は？

話し合いの授業での役割は？

ここです。私たち教師が最高に幸せを感じるのは。

そこを取りにいきましょう。

そこで勝負しましょう。

せつかくなりたくてなった教師なのですから。

本書が、教師としての「日常」を輝かせるために役立つことを願っています。

そのために、本書はできるだけだけリアルに教室を再現するため、授業での子どもたちとのやり取りを逐一文字起こしをし、誌上に再現しました。

実際に森川学級に参観に来られた気持ちで、お読みいただければ幸いです。

それでは参観後にまたお会いしましょう……。

CHAPTER

3

「書く」指導での教師の日常改革

- 02 01
 02 01
 064 060
 059

CHAPTER

2

学級づくりにおける
「教師の日常改革」

- 02 01
 02 01
 055 048
 047

CHAPTER

1

教師の日常改革、
まずはここをおさえる！

- 04 03 02 01
 04 03 02 01
 038 025 020 014
 013

プロローグ……………004

CHAPTER

6

「読む」指導での
教師の日常改革

- 01 読み取りの授業づくりの中での日常改革……………124
- 02 物語文の「出会いの感想文」の書き方……………134
- 03 子どもの「出会いの感想文」**物語文**……………138
- 04 物語文の「まとめの感想文」の書き方……………143

CHAPTER

5

「話す・聞く」指導での
教師の日常改革

- 01 「話す・聞く」指導では
子どもの発言を繰り返さない……………110
- 02 授業45分間における教師の発言分析……………112
- COLUMN / 3** あなた自身が、子どもが「聞ける」環境になっているか……………122

CHAPTER

4

実録
「音読」指導での教師の日常改革

- 01 「考えているか。」を問う音読指導……………080
- COLUMN / 2** ねらいに沿った「音読指導」を……………108
- COLUMN / 1** 「書くこと」の指導は書く力をつけるだけにあらず……………078
- 03 作文指導での日常改革……………071

CHAPTER
7

実録

「座談会」での教師の役割日常改革

エピソード

206

177

- 05 子どもの「まとめの感想文」**物語文**……………150
- 06 説明文の「出会いの感想文」の書き方……………159
- 07 子どもの「出会いの感想文」**説明文**……………164
- 08 説明文の「まとめの感想文」の書き方……………166
- 09 子どもの「まとめの感想文」**説明文**……………170
- 10 学びを深くする「出会い」と「まとめ」……………175

「教師の役割」をどう捉えていくか

一日一日の授業を大切に

学習指導要領が新しくなり、教科書も変わっていく中で、教育の現場も翻弄されていきます。そうした変化に柔軟に対応し、かといって惑わず、ぶれず、楽しく教師の仕事が続けていくには、教師自身が「日常を変える」ことが必要です。

新しいことがどんどん上から振ってきてても、ぶれない教師というのは、日々の授業が一番大事だとわかっています。毎日、子どもたちの顔をちゃんと見て、自分のクラスの子どもたちに合ったことをしっかりやっている。日々の中で、子どもたち全員を鍛えていくことが大事だと理解し、それを全力で実践しています。

まずは日常的に私たち教師がやっていることを見直していきましょう。日常の中で変えていかなければ、教師の世界は変わりません。

「キーマン」を授業にのせる

福島県の小学校の校長先生から講師のオファーがあり、飛び込み授業と講演に行っていたことがあります。その校長先生がおっしゃるには、子どもたちの「書く力」が弱いということ。そこで、「書くこと」に特化した飛び込み授業を依頼されたのです。そのときにお話を伺ったのが、やはり原発のこと。二〇一一年の東日本大震災から時間はずいぶんたちますが、それでもまだ、現状ではまったく復興しているとは言えません。それは、実際に福島に行ってみてわかりました。報道されていないことはいっぱいあるのです。

震災が起こる前と後では子どもたちの数も大幅に減ってしまいました。各学年とも少数の複式学級です。

これは絶対に行かなければと思いました。そして、行くからには子どもたち同士の間わりを生み出していきたいと考え、一年生から三年生までの四人で一つの授業、四年生から六年生までの三人で一つの授業にし、午前と午後に一コマずつ授業をして、夕方から先生方に話をする研修、ということにしました。

やはりどこに行っても、子どもは一緒です。私は、この福島の子どもたちとともに

勉強できることを本当に幸せなことだと思いました。

学校に着いたとき、子どもたちは教室にいませんでした。車に乗って近くの交流学校に出かけていて、帰ってくるのは、授業の直前10分前くらい。私が先に教室に入っ
て待っていることになったのですが、子どもたちが「ただいま！」と帰ってくると、「えっ、誰？」という反応です。事前に、先生方から子どもたちに話はしてくれていた
ので、「こんにちは」と挨拶をしてくれましたが、初対面はそうした状況でスター
トしました。わくわくする展開です。

まずは、一年生から三年生までの授業をしました。

なかでも一年生の子がととても元氣(?)で、この一年生を授業にのせること
がすべてかな、と思いました。

この一年生が本当に楽しい。授業中いきなり「ねえ。ポケモンって知ってる？」と
質問してきて、私が、「うん、ちよつとよくわからないです」と答えるような面白い
やり取りをしていました(笑)。こういう場合、この子をのせることが授業の安定に
つながります。そこでまず、その子とのやり取りの中から「褒めポイント」を必死で
探します。すると、要所要所で私のほうにきちんと意識を向けているように感じたの
で、次のように声をかけました。

「あなた、全然話聞いてへんようで実は聞いているね」

すると、だんだんその子のほうからバンバン授業について質問したり、「先生、今、
何て言った？」などと非常によく反応してくれたのです。この一年生を「よしよし」
とのせていったら、授業もとてもうまくいきました。

授業をするときは、クラスに必ず「キーマン」がいます。その子をどう授業にのせ
るかで授業の進み方、雰囲気は大きく変わります。

授業で子どもを「疲れさせて」いるか

次に、午後の授業です。複式の四年生、五年生、六年生のクラスへの授業です。飛
び込み授業ですが、「日記を生まれ変わらせる」というねらいで授業をします。そこで、
子どもたちの日記を事前にこっそり担任の先生からもらっておきました。

「今日は、この文章を見ていこうね」と言いながらクラスの子の日記を出すと、子
どもたちは、「あれっ、この日記はもしかしたら私たちの？あれっ、何で持ってい

るの？」と、良いざわつきが起きてきました。授業の冒頭から、予定調和を壊していきます。

さて、かくして自分の日記を、描写を入れながら生まれ変わらせるといふ展開で授業は無事終わったのですが、その授業の終わりに印象深いことが起こりました。

「これで終わります。ありがとうございます」といふ授業挨拶の後、五年生、六年生の女の子二人が、教室の床にベタツツと倒れて、頭を抱えて「うわ。疲れた」と言ったのです。私はそれを見て、「あつ、来て良かったな」と実感しました。なぜなら、子どもたちにたくさん思考させたかった、頭を疲れさせたからです。

皆さんの日常の授業はどうですか。ゆるくなっていますか。せめぎ合いはありますか。この子たちの担任の先生は、若くて熱心な男の先生でしたが、三人という少人数での子どもたちとのやり取りの中で、おそらく子どもたち同士のせめぎ合いをあまり生んでいなかったのではないかと思われれます。

そこで、いつも私のクラスで行っているように、遠慮せず、ガンガンぐいぐい飛ばしながら授業を行っていききました。「はい、あなたは？」「はい、あなたは？」というように。その結果、授業が終わって、その子たちは頭を抱えて「疲れた」と言ったのです。

授業が終わってから担任の先生や周りの先生に言われました。「先生、ここまで突っ込まないとだめなんです」と。

少人数複式での授業は私自身もこれまで未体験のことでしたが、授業に子ども的人数は関係ありません。クラスの全員が頭を働かせているかどうかが重要なのです。これは当たり前なことではありますが、本当に大切なことなのだ、この経験から改めて確信することができました。

たとえ少人数のクラスであっても、三十人、四十人のクラスであっても、日本全国どのような教室でも、教師は子どもたちと授業をしている以上、一人残らず動かし、思考させ、話を聞かせ、誰一人として置いていかないという気概が必要となります。私はその後の講演で「子どもたちを疲れさせてください」と先生方に伝えました。

もしクラスが三人でも発言の機会を十回まわせば三十人になります。それは、どこにいても一緒です。地域などは一切関係なく、そこで担任している教師がそこでできることに全力を尽くし、そして、その子どもたちが世界に出ていくということを、私たち教師はしっかりと意識しないといけません。

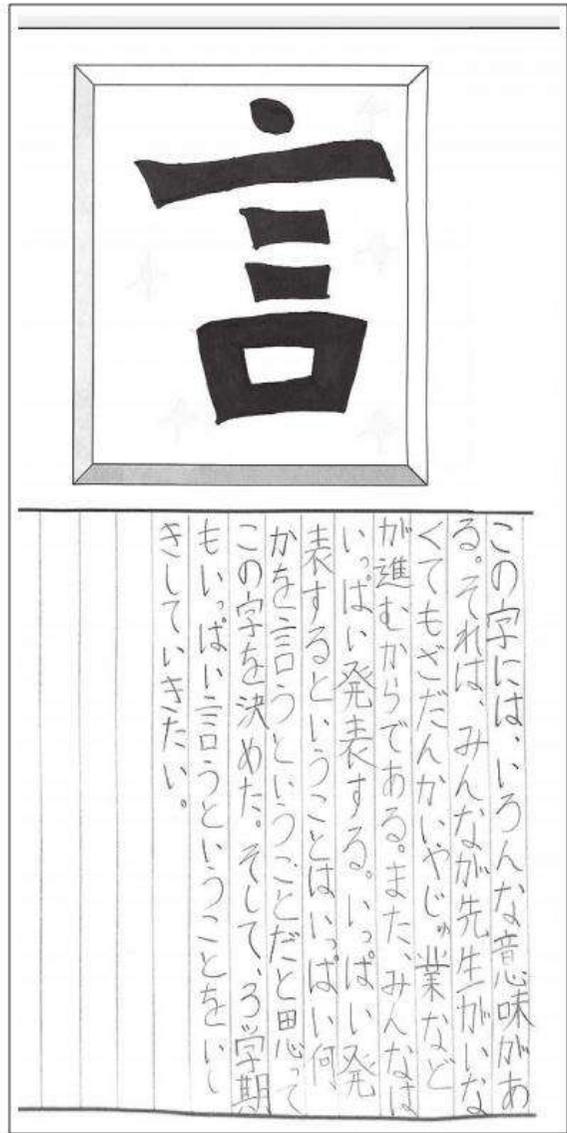
教師という仕事は難しいものではありませんが、今日一日を無駄にせず、本当に尊い仕事をしていると自信を持って、様々な局面を乗り越えていきましょう。

「教師の“出番”の仕掛け方

出るときはどんだん出る

四年生を担任しているとき、二学期の終業式がインフルエンザの拡大防止のために一日繰り上がり、通知表はその直前にあつた懇談会で保護者に渡すことになりました。本来なら、終業式の日には「一学期、ごくろうさん」と言つて子どもたちに直接渡すのですが、それができなくなり、その代わりに国語のノート子どもたちに配ることにしました。ちょうど授業で大きなまとめをしたところで、ノートには単元の「まとめの感想文」(CHAPTER6で詳述)の評価が書いてあるのです。私も配るとき少しドキドキしていましたが、子どもたちはそれ以上で、通知表よりも緊張していて、友だち同士、「一緒に開けよう」と言いながら、「せーの」でノートを開いていました。私のクラスでは、「書くこと」が学びの「柱」になっています。

終業式の日は時間が余つたので、最後の最後まで書かせました。「今年一年の漢字、自分の漢字を書く」ということをやりました。一年を一字で表す取り組みです。ここで、子どもたちが書いた字を二つ紹介します。一つは、「言」という字。



もう一つは、「新」という字。



さて、この「一字」を書かせるときに子どもたちが「先生、この漢字の二重文字の書き方を教えてください」と言ってきました。二重文字とは、筆で書いたような字で、子どもたちはそれを書きたがるのですが、なかなか難しい。

一人の子にホワイトボードに書いて、「それを写しなさい」と言ったら、「先生、これも書いてください」とどんどん要望が出てきてしまいました(笑)。

こういうとき、与えるべきことは、パツと勢いよく与えることが大事です。そして、子どもたちには長々と話したりせずに、「これでやってみなさい」というアドバイスを次々に出していくようにします。そういうケースもある、ということ。

逆に、待つときはとことん待つ。その切り替えが大事です。

「好き」を「強み」にする

このときは、私自身がレタリングや絵を書くのがたまたま好きだったこともあって、どんどん教えていったということもありますが、それぞれの先生方が好きなことを活かしていくことが教師としての強みになります。

その強みが必要とされたときは、惜しみなく出していきま



二重文字の板書(笑)